

岡部昌生 Masao OKABE

「被爆樹に触れて」フロッタージュ+鉛筆+紙 55×75 cm クスノキ 2008年

「被爆樹に触れて」フロッタージュ+オイルチョーク+鉛筆+紙 55×75 cm イチョウ 2008年

「被爆樹に触れて」フロッタージュ+鉛筆+紙 55×75 cm ユーカリ 2007年

●第52回ヴェネチア・ビエンナーレ国際美術展日本館「わたしたちの過去に、未来はあるのか」 岡部昌生

漆黒の、闇のような静寂な空間に、鉛筆が石に叩きつけられるような擦過音が響く。ストロボが閃光のように瞬時、激しく左右に振れる右手を射す。「言葉に表せない感動を得た。戦争は人を盲目にしたが、ヒロシマ以後あなたが制作することで、いったん盲目になった人に光を与える仕事が可能であることを示してくれた。ここまでできたかった。」

スロヴェニア出身でパリに住む盲目の写真家ユージェン・バフチャルさんは、広島・宇品のプラットフォームの被爆石に触れ、私との「擦り+撮る」共同作業を終えそう語り、「被爆イチョウのフロッタージュに手を添え写真を撮りたい」と私につよく促した。傷をかかえ「声を発しない生命」。そと手をあて樹木を撫でる。手に触れ、手で見てバフチャルさんに伝えたいと思った。(美術家)

●ヒロシマの後の芸術のために ユージェン・バフチャル

わたしたちは、世界についての思考にとって「ヒロシマ以前」と「ヒロシマ以後」があるということ、繰り返し確認せざるをえない。この点で岡部昌生の作品は、避けられぬことを乗り越えようと望む人間の弱さを思い出させるとともに、自己超越としての芸術を問い直すように、私たちを招いているのである。

岡部の作品は、子供の遊びに見えるかもしれない。もちろん、それは子供じみたという意味ではない。ヒロシマの後では、幼年としての芸術も芸術としての幼年も不可能なからだ。どう望もうとも、芸術家は死と灰の観智を受け入れざるを得ないのだ。そしてこの点にこそ、宣告された死、あるいは現実の死を超えたところで、現代の芸術が発見する、新しいかたちがあるだろう。

わたしはあるとき岡部昌生の制作の現場に立ち合うという幸運を得た。彼はヒロシマの石にどのようにして鉛筆を走らせるかをわたしに見せようとした。彼は書くのではなく、まして描くでもない。彼の鉛筆は疲れを知ることなく、傷ついた石の瘤や窪みに沿って走り、時間の刺し傷を記録していたのだ。そうすることで彼は、表象不可能なイメージに出会うことなく、限りない喪の仕事を行なっているのだ。

新しい紙に触れようと手をのぼしたとき、港千尋がわたしに囁いた。「今度は君のために、黒い紙を使うようだ」。わたしの「近接しすぎた眼差し」のための気遣いに感動して、わたしは鉛筆の動きに耳を澄まし、あたかもそのなかにイメージを、さらにはけっして記録されたことはない原子爆弾の爆発の音までも見いだし、記憶しようとしたのだった。(写真家 翻訳：港千尋)

●樹の教え 港千尋

木の生活は、そのほとんどが人間には見えないところで営まれている。それはひとつの世界である。その体内には幾千幾万の小さな川が流れ、隆起する樹皮は目に見えない生命が住まう土地となり、空に向かって大気をつくりだす。木々の根が、暗い地中でどのようなコミュニケーションを行なっているのか、わたしたちは知らないだろう。目には見えない水脈を地上に描き出すとき、季節の変化を色彩や輝きによって知らせるとき、感性や知性もまた、文明とよばれる永い時間のどこかで植えられたのではないかと思えてくる。

とがった先端で書くことを教え、粘土板を焼く炎をつくり、紙を与え、そして本を授けたのは、木である。書物を意味する単語の底に樹皮の意味が隠れ、言葉の中に葉っぱが揺れている。そのようにして木の技術が支えてきた文明の長い長い時間が、たったひとつの爆弾によって断ち切られるとは、誰が予想しただろうか。文明の先端から落下した極小の火が、すべてを灰に帰するとは。

だが木は蘇り、鳥たちは戻ってきた。その下で岡部昌生が樹木を擦る。紙をあて鉛筆の先端を滑らせながら木を擦るとき、芸術家は感性と知性の永い時間を溯行している。ゆるやかに曲線を描く腕のストロークによって、大地から吸い上げられ、素晴らしい高みへと上昇してゆく幾千の川を遡ってゆくための、櫓が漕がれる。

それは木の内部に保たれている秘密を聴くための、はるかな旅である。(写真家・批評家・多摩美術大学教授)

●"ébionim" 宮岡秀行

今なお残る被爆樹の傷跡をフロッタージュによって擦り取る岡部昌生の姿を追ったドキュメンタリー。紙をあて、鉛筆を滑らせながら痕跡をこする岡部のストロークは、歴史が消し去る前の過去の忌まわしい記憶を、まるでレントゲン写真のように浮き上がらせる。

タイトルのébionim(エビオニウム)とは、ヘブライ語のebion(貧しい)に語源を持ち、「貧しき者たち」という意味がある。ヒロシマというものに可能性があったら、この「最低線」ではないか。自分はそのから出発したのだし、被爆樹はそれを覚えている、という思いをこめた。広島という都市自体は変化し続けるが、そのなかの移ろわないものを抽出してみたかった。(映画作家・スタジオマラバルテ主宰)

2008年/33分/digital 制作・監督・撮影：宮岡秀行 音楽：鈴木治行

●被爆樹に触れて

制作Ⅰ 2007年10月6日-10月7日 安田学園 鶴見橋東詰 鶴羽根神社 明星院 報専坊 縮景園 同行：石丸勝三 木村成代 竹澤雄三 港千尋 12点制作
制作Ⅱ 2007年11月23日-11月24日 安楽寺 鶴見橋東詰 広島城二の丸跡 基町RCC北西側 報専坊 白神社 基町子ども文化科学館東側 基町青少年センター西側 善正寺 西本願寺別院 橋本町上柳橋西詰 礎神社 宝勝院 禿翁寺 光明院 同行：石丸勝三 33点制作
制作Ⅲ 2008年2月20日-2月23日 基町裁判所アパート南側 安楽寺 基町市営住宅南西側駐車場 ふくしま保育園東側舗道 西観音本町平和大通緑地帯 天満小学校校庭 縮景園 三篠神社 広島城日本宮跡 広島城二の丸跡 新庄の宮神社 同行：宮岡秀行 守田靖 26点制作
制作Ⅳ 2008年8月8日-8月9日 広島城二の丸跡 基町市営住宅南西側駐車場 RCC北西側 上八丁堀 基町裁判所アパート南側 住吉神社 吉島稻生神社 同行：三上賢治 河原佑真子 木村成代 木村ヒカリ 20点制作

MASAO OKADA PROTAGONIST PROJECT



A-BOMBED TREE
HIROSHIMA



MASAO OKASE PHOTOGRAPH PROJECT

A-BOMBED TREE
HIROSHIMA

岡部昌生「被爆樹に触れて」フロッタージュ+オイルチョーク+鉛筆+紙 55×75 cm イチヨウ 牛田本町浄土真宗本願寺派安楽寺 2008年2月20日 同行：宮岡秀行 爆心地から2160 m



MASAO OKABE PROTAGONIST PROJECT

A-BOMBED TREE
HIROSHIMA

被爆樹
広島市
23 Nov. 1945

A-bomb tree
Fuchiyama
Aomori Prefecture
Japan
23 Nov. 1945



岡部昌生「被爆樹に触れて」プロッタージュ+鉛筆+紙 55×75cm ユーカリ 広島城二の丸跡 2007年11月23日 同行：石丸勝三 爆心地から740m